様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：14301
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：23810018
研究課題名（和文）　東アフリカ国境地域における地域紛争への介入と多民族共生社会の形成

研究課題名（英文）　External Interventions on Local Conflicts and Formation of Multi-Ethnic Society in the East African Border Region

研究代表者　佐川　徹　　（SAGAWA TORU）
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・助教
研究者番号：70613579

研究成果の概要（和文）：
東アフリカ牧畜社会の地域紛争へ介入する外部アクターは、国際社会の場で強調される「地域の慣習の尊重」という論理に影響を受けて、現地社会でもともとあまり重視されていなかった「伝統的儀礼」を平和構築介入の場で「再現」させようとする傾向がつよい。これまで実際の平和の回復を担ってきた、より目につきにくい集団境界を越えた個人的な友好関係を、いかに平和構築介入のために利用できるかを考えていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：
In east African pastoral societies, external actors on local conflicts tend to attach a high value to ‘regeneration of traditional ceremony’ which is not necessarily given importance in local society.　External actors need to consider how to activate and appropriate ordinary trans-ethnic individual networks of pastoral peoples which have taken roles to restore peaceful relations for long years.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：平和構築、多民族共生、低強度紛争、外部介入、東アフリカ牧畜社会

１．研究開始当初の背景

今世紀に入って、アフリカ大陸各地で平和構築を目的とした外部介入がなされている。欧米のドナーが多くの資金を提供し、各国政府や非政府組織が、これらの活動に従事している。しかし、地域固有の事情を考慮しない政府らによる一方的な介入が、対象社会に混乱をもたらしていることがしばしば報告される。より適切な介入を実施するためには、地域社会の紛争と平和の論理を十分に考慮する必要がある。

２．研究の目的

東アフリカの乾燥地域に位置する牧畜社会は国家の最周縁に位置しており、自動小銃

が拡散し、さまざまな規模の紛争が頻発している。これまでこの地域は、政府らからなかば放置されてきたが、2000 年代に入り平和構築介入の対象とされるようになった。

研究の目的は、この東アフリカ国境付近の牧畜社会を対象に、外部アクターによるいかなる介入が地域社会の有する平和に向けたポテンシャルを活性化していくことができるのかを検討し、民族間の和解を促進し地域に多元的な共生社会を実現していくための方途を探ることである。とくに、政府らによる「上からの」介入が、地域住民が自発的に試みている「下からの」平和構築実践といかに接合しうるのかを探求する。

３．研究の方法

エチオピア西南部、ケニアと南スーダンとの国境付近にくらす牧畜民ダサネッチを対象として、おもに(1)外部アクターが地域社会に介入する論理と、(2)外部アクターによる介入が地域社会に与える影響、の 2 点に焦点を当てる。

(1)については、エチオピア政府やケニア政府、両国の非政府組織などが、いかなる論理に基づいて介入をおこない、またそれらの論理がグローバルな言説とどのような関係をもちながら生産されているのかを明らかにする。そのために、政府や非政府組織の事務所などを訪問してインタヴュー調査をおこなう。

(2)については、実際に介入がおこなわれている現場、とくに外部アクターが開催する平和会合の場で生起している現象を分析して、そこでいかなる問題が発生し、それが在来論理と介入論理のいかなる差異から生じたものであるのかを明らかにする。

４．研究成果

(1)地方政府が中心となって 2012 年に開催した 3 つの平和会合の内容を分析した。平和会合とは、対立する二つ以上の集団の成員を集めて、戦いの無意味さや平和の重要性を議論させる場である。いずれの場でも参加者は 100 人程度におよぶ、比較的大規模な会合であった。会合の場でとくに目立ったのは、介入者側が「地域の伝統的儀礼の再現」に腐心している姿である。この背景には、国際社会の場で「現地の慣習」を介入に取り入れる必要性を強調する言説が強まってきたことが影響していたと考えられる。

(2)しかし、現地の人びとは必ずしもこの儀礼の場には積極的に参加していなかった。そもそも、多くの人は儀礼がどのような手順で進むのかをあまり把握しておらず、介入者側が儀礼の進め方を地域の牧畜民に教示する、というおかしな状況もみられた。

この地域では、紛争終結後に必ずこの儀礼がおこなわれてきたわけではない。この地域には対立する集団の境界を越えて個人的な友好関係が広がっており、こういった成員同士が相互往来を再開することを契機に、戦争後に平和的な関係が回復されることが多かった。そのため、人びとは儀礼に対してはあまりつよい価値を置いていない。介入者側が「平和構築に資する地域の伝統」として取り上げた儀礼の再現に人びとが積極的に関与しなかった背景には、このような要因があった。

(3)儀礼の遂行それ自体に多大な時間が割かれた結果、人びとがたがいに議論する時間が短くなったことは、会合全体にとってマイナスであった。

(4)また平和会合の儀礼以外の場では、政府による「上からの」介入姿勢が目立った。これは私が 2006 年に観察した平和会合の様子とは対照的である。当時はローカル NGO のメンバーらが、地域の人々にできるかぎり長い時間発言できるように、さまざまな配慮をしていた。しかし 2012 年には政府の政治家や役人らによる話が目立った。ローカル NGO は 2009 年のエチオピアの法律によって活動することが困難となり、地方政府が介入する唯一のアクターとなっていることが、「上からの」介入を尖鋭化される一要因となっている可能性がある。

(5)外部アクターは地域社会に介入する上で、目につきやすい儀礼などを「現地の慣習」として採用する傾向があるが、この地域で実際の平和の回復を担ってきた集団境界を越えた個人的な友好関係を、平和構築介入の場でいかに活性化し、活用していくことができるのかを考えていく必要があることが指摘できる。

(6)政府は、一方で「平和構築」の名目のもとに多くの介入をおこなっているが、他方で新たな紛争の火種をもたらしている。具体的には大規模な農場建設や石油開発、ダム建設である。ダサネッチを始めとした地域住民は適切な補償がないままに、長年くらしてきた地域からなかば強制的に排除されつつある。利用可能な土地が減少すれば、近隣集団との間に資源をめぐる新たな紛争が生じる危険性がつよい。こういった開発の動きが地域の集団間関係に今後どのような影響を与

えていくのかを、注意して観察し続ける必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 5 件）

① 佐川　徹 2012 「暴力」「乾燥地帯」「ジェノサイド」東長靖・石坂晋哉（編）『講座生存基盤論 6　持続型生存基盤論ハンドブック』京都大学学術出版会、pp. 162-163. 254. 386-387。

② 佐川　徹 2012 「『敵』と結ぶ友人関係―東アフリカの紛争多発地域で生存を確保する」速水洋子・西真如・木村周平（編）『講座生存基盤論 3　人間圏の再構築』京都大学学術出版会、pp. 183-206。

③ 佐川　徹 2012 「だれが治安を守るのか―東アフリカ農牧社会における低強度紛争と自警団」島田周平教授退職記念事業実行委員会（編）『多様性、流動性、不確実性』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、pp. 52-57。

④ 佐川　徹 2011 「書評：田中二郎著『ブッシュマン、永遠に。』」『アフリカ研究』78: 94-95。

⑤ Sagawa, Toru 2011 Relational networks and peace-making in East African pastoral societies (South Omo). Paper submitted to First International Forum on Conflict Resolution and Coexistence through Reassessment and Utilization of "African Potentials. Nairobi, Kenya. 5p.

〔学会発表〕（計 10 件）

① Sagawa, Toru 2013 Forms of conflict and cooperation among the Daasanach and their neighbors. Max-Planck-Institut für Ethnologische Forschung Workshop: Interrelated Conflicts in a Northeast Africa Border Region (Azomia 1). Halle, German. 14-16. Feb 2013.

② 佐川　徹 2013 「『暴力と歓待の民族誌―東アフリカ牧畜社会の戦争と平和』について」大阪大学人間科学研究科、大阪、2013 年 1 月 29 日。

③ 佐川　徹 2013 「東アフリカ牧畜民ダサネッチの「敵」に対する態度と応答」国立民族学博物館共同研究「交錯する態度への民族誌的接近－連辞符人類学の再考、そしてその先へ」、2013 年 1 月 27 日、大阪。

④ 佐川　徹 2013「成長するアフリカの最前線―エチオピア西南部サウスオモ県における大規模開発」日本文化人類学会中国・四国地区研究懇談会・日本アフリカ学会中国・四国支部例会。2013 年 1 月 12 日、岡山。

⑤ 佐川　徹 2012「21 世紀のアフリカ分割?―土地強奪が東アフリカ牧畜社会に与える影響」地域研究コンソーシアム次世代ワークショップ『現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて―アフリカとオセアニアの事例から考える』、2012 年 12 月 9 日、大阪。

⑥ 佐川　徹　2012「牧畜社会の戦争と平和に出会う」平成 24 年度京の府民大学：京都大学アフリカ地域研究資料センター公開講座『出会う』、京都、2012 年 6 月 16 日。

⑦ 佐川　徹 2012 「東アフリカ牧畜社会における地域紛争と自警団」日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（S)「アフリカの潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」政治・国際関係ユニット 2012 年度第 1 回研究会。5 月 12 日、京都。

⑧ 佐川　徹　2012「個から捉える戦いと和解の実相―東アフリカ牧畜社会の地域紛争」京都大学アフリカ地域研究資料センター 第 185 回アフリカ地域研究会、京都、2012 年 1 月 19 日。

⑨ Sagawa, Toru 2011 Relational networks and peace-making in East African pastoral societies (South Omo). First International Forum on Conflict Resolution and Coexistence through Reassessment and Utilization of "African Potentials. Nairobi, Kenya. 2-4. Dec. 2011.

⑩ Sagawa, Toru 2011 After 'getting drunk with Kalashnikovs': Violence and spontaneous order in the Kenya-Ethiopia borderland. 110th Annual Meeting of American Anthropological Association. Montreal, QC, Canada. 16-20. Nov. 2011.

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐川　徹　（SAGAWA TORU）

研究者番号：70613579

(2)研究分担者

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：